## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ Keio Associated Repository of Academic resouces

	of Academic resources
Title	分子と形態の融合による、キャンパスネットワーク微小生物環境モニタリング
Sub Title	Environmental monitoring of the on-campus microbiological network using molecular and morphological approaches.
Author	辻本, 惠(Tsujimoto, Megumu)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2022
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2021.)
JaLC DOI	
Abstract	近年、微生物が生態系はもちろん住環境にも大きな影響を与えていることが報告されている。慶 應義塾大学は大都市(三田)、都市(日吉)、郊外(湘南藤沢)のそれぞれにキャンパスを有し ており、微生物環境と住環境が運動したモニタリングボストを設置する上で適している。この地 埋的利点を最大限に活用して、キャンパスを主対象として微小動物も含めた微小生物環境のモニ タリングを実施し、さらにはCOVID-19により社会活動の停止した2020 年とオリンビックが開催された2021 年という対照的な2 年の比較により、とトの移動が微小生物環境に及ぼす影響を検出することを目的とした。3 年計画の最終年度となる2021 年度は、東京オリンビック前後にサンプリングを実施するとともに 、サンブルの分析・解析を進めた。 パクテリアを対象としてショットガンメタゲノム用サンブルを用いてMetaPhIAn3により推定され たパクテリア群集組成は、人工環境(大学キャンパス、地下鉄の駅などの)サンプルとコントロ ールとの間で明らかに異なり、大学キャンパスと地下鉄の駅との間で異なる傾向が出た。メタゲ ノム分析ツール Pavian を用いて可視化したサンキー図からは一般にヒトの皮膚に生息する細菌の 存在量が多いことが分かった。 一方で微小動物については、湘南藤沢、日吉、三田では異なる出現傾向を示し、郊外(湘南藤沢 )から都市(日吉)、大都市(三田)にかけてクマムシの個体数や種数は増えることが分かった。 一方で微小動物については、湘南藤沢、日吉、三田では異なる出現傾向を示し、郊外(湘南藤沢 )から都市(日吉)、大都市(三田)にかけてクマムシの個体数や種数は増えることが分かった。 の方間性能力が高いクマムシは、自然豊かな環境よりも人工的な環境の方に多く生息している 可能性があることが考えられたと同時に、最も歴史のある三田キャンパスに、より多くのクマム シが生息していた可能性も考えられた。今後は建物の歴史も含めて解析を進めて論文に繋げる計 画である。 今後さらなる解析を進めて、キャンパス間や時系列による比較を詳細に行い、ヒトの移動が微小 生物環境に及ぼす影響を明らかにする。 In recent years, microbes including bacteria and fungi are found to have substantial effects on the ecosystem as well as our living environments. In this study, we aim to investigate the effect of the worldwide transportation of the people on the microbial environment by setting up the monitoring stations at three campuses, Mita, Hiposhi, and SFC, which differ greatly in city scales and by sampling between the Tokyo Olympic and also under the COVID-19 pandemic situations. In 2021, the last year of the three-year project, we sampled the microbes at SFC, Hiyoshi, and Mita campuses, thom analyzed the samples. Using the Shot-gun metagenome samples obtained in our study we analyzed the bacterial controlled samples (positive and negative), and they also differ ptexeen the university campuses and the rainway stations. In addition, we found a high abundance of human skin-related bacteria in the samples living on campus among the three campuses. There was an increase in the individual numbers and also in the species diversity as we progress toward the civing the attrice and r
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2021000004-20210038

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 2022 年 4 月 11 日

## 2021 年度 学事振興資金(共同研究)研究成果実績報告書

研究代表者	所属	環境情報学部	職名	專任講師(有期)	──補助額	1,996	千円		
	氏名	辻本 惠	氏名(英語)	Megumu Tsujimoto	而功极	1,330 113			
分子と形態の融合による、キャンパスネットワーク微小生物環境モニタリング									
研究課題(英訳)									
Environmental monitoring of the on-campus microbiological network using molecular and morphological approaches.									
氏	名 Name		所属・学科・	職名 Affiliation, department, an	nd position				
辻本 惠(Meg	jumu Tsujimoto	) 環境情報学部•專任	環境情報学部·專任講師(有期)						
ーノ瀬 友博(Tomohiro Ichinose) 環		ose) 環境情報学部·教授	環境情報学部·教授						
黒田 裕樹(Hiroki Kuroda)		環境情報学部·教授	環境情報学部·教授						
鈴木 治夫 (Ha	aruo Suzuki)	環境情報学部·准教	授(有期)						
1. 研究成果実績の概要									
近年、微生物が生態系はもちろん住環境にも大きな影響を与えていることが報告されている。慶應義塾大学は大都市(三田)、都市(日									
吉)、郊外(湘南	「藤沢)のそれ→	ぞれにキャンパスを有しており	、微生物環境と	:住環境が連動したモニタリン?	グポストを設置す	する上で適	刨て		
いる。この地理的利点を最大限に活用して、キャンパスを主対象として微小動物も含めた微小生物環境のモニタリングを実施し、さらに									
		の停止した 2020 年とオリンピ							
		検出することを目的とした。3	年計画の最終	年度となる 2021 年度は、東京	オリンヒック前行	後にサンプ	ן צעי		
		ルの分析・解析を進めた。 ・ガンメタゲノム用サンプルをF	モリイ MataDal	ヘ_っ? に とし 推 空 さわ た バクニレ	マ联年組式は	ᅵᅮᅖ	±(+		
学キャンパス、地下鉄の駅などの)サンプルとコントロールとの間で明らかに異なり、大学キャンパスと地下鉄の駅との間で異なる傾向が出た。メタゲノム分析ツール Pavian を用いて可視化したサンキー図からは一般にヒトの皮膚に生息する細菌の存在量が多いことが									
分かった。									
一方で微小動物	物については、	相南藤沢、日吉、三田では異な	はる出現傾向を	示し、郊外(湘南藤沢)から都	市(日吉)、大都	市(三田)	にか		
けてクマムシの個体数や種数は増えることが分かった。環境耐性能力が高いクマムシは、自然豊かな環境よりも人工的な環境の方に									
		ることが考えられたと同時に、			)クマムシが生息	見していた	可能		
		の歴史も含めて解析を進めて言					(		
	析を進めて、キ	キャンパス間や時系列による出	比較を詳細に行	い、ヒトの移動が微小生物境	項に 皮はす 影響	著を明らか	いこす		
る。									
2.研究成果実績の概要(英訳)									
		luding bacteria and fungi are					-		
environments. In this study, we aim to investigate the effect of the worldwide transportation of the people on the microbial									
environment by setting up the monitoring stations at three campuses, Mita, Hiyoshi, and SFC, which differ greatly in city scales and									
by sampling between the Tokyo Olympic and also under the COVID-19 pandemic situations. In 2021, the last year of the three-year									
project, we sampled the microbes at SFC, Hiyoshi, and Mita campuses, then analyzed the samples. Using the Shot-gun metagenome samples obtained in our study we analyzed the bacterial community composition with MetaPhIAn3.									
The bacterial community compositions differ greatly between the artificial environment such as university campuses and railway									
stations and the controlled samples (positive and negative), and they also differ between the university campuses and the railway									
		a high abundance of human sl					, i		
On the other h	and, we observ	ed the obvious trend of the a	bundance and s	species diversity of the tardig	rades living on o	campus ai	mong		
the three camp	uses. There wa	as an increase in the individua	I numbers and	also in the species diversity a	s we progress t	oward the	e city		
(Mita) from the suburb (SFC). We assume tardigrades, which are known for having the ability to tolerate the extreme environment,									
may prefer the artificial harsh environment rather than the rich natural environment. We also consider the possibility that tardigrades									
prefer long-established buildings as their habitat.									
	х <b>г</b> . д		研究課題に関す		<del>۵۵۸۸۰۰۰۰۰۰</del> ۰۰				
発表者 (著者・	i 氏名 講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	()	発表学術誌名 著書発行所・講演学会) 	学術誌3 (著書発行年月	著行年月 引・講演 <sup>4</sup>	∓月)		